

## 共同研究の経緯

# 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究

——海域・海民史の総合的研究 3——

研究代表者 後藤 明

はじめに

この共同研究は現地調査や博物館資料あるいは文献研究を蓄積してきた研究者が集い、日本を挟んで熱帯から寒帯域を包摂する環太平洋海域における伝統船舶の製作やその操船術・航海術に関する総合的ないし比較的研究を目指したものである。

21世紀の今日、そのような「伝統的」造船技術やその操作技術は漁撈や運搬といった本来の用途の中では必ずしも生きていない。たとえば太平洋各地で進むカヌールネサンス運動が如実に示すように、しばしば先住民文化復興の一環として「伝統船」が再構築され、現代的な脈絡において生業や教育の中で活かされているのである。このような状況下において本共同研究では現代の小型船舶の製造技術や航海術が、環太平洋の住民にどのように伝授・教育されてきているのかを実証的に捉えようとするものである。さらに日本各地で試みられている伝統的船舶の復興建造も先住民運動のような国際的な脈絡で位置づけようとするのである。

本研究では環太平洋地域における伝統的船舶製作に関する技術の比較研究を行うとともに、シンボル性の高い船の文化的意義について考察する。たとえば日本の古墳壁画の重要なモチーフは船である。このように船は象徴性が高いからこそ、今日においても世界各地で文化復興のシンボルとなる確率が高いのではないかと筆者は推測する。

本班の趣旨である環太平洋の伝統的な船作りについて、2度のシンポジウムが行われた。

第1回目（2010年12月）は「フネとカラダ—フネの構造と漕法—」と銘打ち日本を取り巻く環太平洋海域における伝統的船舶作りの現状について比較を行った。従来のように民具としての船そのものの形態や構造の比較ではなく、船の乗り方あるいは作り方における身体技法、すなわち身体が製作用具や船体とどのように一体化しているかを分析した。とくに櫂や櫓あるいはパドルといった船の人的推進具の使い方と身体技法との関係を示し、たとえば同じ櫂や櫓を同じ人間が状況に応じてどのように使い分けているかといった実践論的議論を行った。

とくにカラダを問題としたのは近年注目されている身体技法の問題を扱いたいからである。道具はその形態や構造を分類すれば終わりではなく、とくに手動道具の場合はそれを使う人間の身体との関係で理解しなくてはならないという立場である。そしてそのような道具と身体の使い方の連続が動作連鎖の概念になっていくわけである。

フネの推進具とくにその使い方と身体との関係に注目した本セッションは民具研究に新しい光を

あてるものと期待される。

第2回目は「南と北の船—日本列島の船造りの多様性のルーツ—」(2013年2月)であった。午前中は本班のみのセッションで、後藤が趣旨説明のあと、日本列島の古代に存在していた船の種類、さらに日本の北方や南方に連なる地域の船について概観した。次に門田、宮澤が南方の船の代表としてミクロネシアのカロリン諸島・ポロワット島における航海カヌー製作の全工程を撮影した120時間にわたるビデオのダイジェストを披露した。さらに洲澤は函館市北方民族資料館所蔵のバイダルカ式カヤックの系譜についてアリュートやイヌイトの船を概観しながら論じた。会場からは日本や周辺地域の船の起源や分布について熱心な質問が寄せられた。

午後は「民具の名称に関する基礎的研究」班との合同のセッション「日本の船—技と名称—」であった。本班からは昆が参加し、青森を中心とした北日本の和船の名称について長年の調査結果を披露した。船は機能、形、構造、乗組員など脈絡に応じてさまざまな呼び名が付与されるという事実は、本班の板井研究報告(サバニの名称)ともあわせ、民具名称班との連携をさらに強めていく必要性を感じた。その後、民具名称班の真島の発表は日本の和船の分布研究の一端を披露したものであり、全体として日本の伝統的な船の研究について新しい視点を開くことができたと考える。

本論集に収録された論考は2章に分かれて掲載されている。まず第I章の「環太平洋海域における船殻形成の諸相」では班員の専門地域に特化した論考が掲載されている。第II章の「環太平洋海域における伝統船の基礎資料」では特定地域の調査報告や広範囲な資料の集成の両方が含まれ、今後の比較研究のためのデータベースとなっている。

第I章において昆は津軽海峡周辺を中心に、船底部に削り抜き材「ムダマ」を使用したムダマハギに注目し、みちのく北方漁船博物館にあるコレクションを中心に、その地方差と変遷をたどっている。そしてムダマハギの船殻形成技術と構造船の技術の違いを明らかにした。そして船体の構造が著実に現れる船体中央部に焦点をあててその変遷をたどっている。またムダマハギのミヨシの形状に注目し基本的にムダマハギはイタミヨシであるが、地域によってシマイハギの技術を取り入れたソトミヨシに変化している。このような複合的な技術変動の分析から削り船から構造船へという環太平洋的な問題に迫る視座を提供する。

赤羽は長年日本列島、とくに日本海側の和船の調査、さらに本共同研究ではアムール川やバイカル湖といった北方シベリア内水域の伝統船の調査を行った。その結果舳先・艫別形で船殻は平張り(carvel-build)、推進には帆を用いる南方系の舟と、舳先・艫同型で船殻形成は鎧張り(clinker-build)、推進はシングルないしダブルブレードパドルが中心である北方船という二つの系譜を定義した。そして両者が出会った日本列島では秋田県の漁船に南北両系統の技法が混在する証拠が見いだせるとする。しかし事態はそれほど単純ではなく、小型の漁船や川船を中心に南方船でも舳艫同型の船も存在することを示す。この現象の説明のために生態学的な条件や歴史的経緯を含めた技術的選択の重要性を指摘する。

大西は洲澤との共同調査を行った函館市北方民族資料館に収蔵されているバイダルカについて分析を進めた。この資料は千島列島中部のシムシル島で採集された。記録ではこの地にアリュート列島のアリュート族が毛皮採集のためにロシア人によって移住されたので、アリュート型のバイダルカが作られたことになっている。大西と洲澤はこの資料を詳細に検討し、その蓋然性は高いが、大西はさらに考察を進め、このバイダルカが三連座式という特有の形態をしている点、直進ならば走波性に優れるものの、比較的細身の船体は横からの風雨には弱点があるので、その欠点をパドリングで補いながら、近海での狩猟(おそらくラッコ)にスピードをもって対処するための選択

であったと分析した。

板井は既存の船研究の欠陥を、資料の時間軸における恣意的な扱い、また船をセット（考古学ならば組成）として見る視点の欠如をあげる。そしてトカラ以南のサバニなどの名称と構造を分析するとトカラ列島中北部では汎用船として多方面に使われたが、同列島南部では定期船の舢舨として専用船化し、奄美大島では変化はなく他船との使い分けが継続したことを明らかにした。また沖縄群島以南においては複材化してサバニへと変化し漁業用に特化され、形態を変化させて独自の発達をした。このように「日本・ヤマト」「オキナワ・南島」という境界線の動的な性格を明らかにした。またその境界は櫓などの推進用具の使用においては異なった線引きも可能であると指摘している。

第Ⅱ章であるが、まず川田論考はチキリを用いた船殻造成は新潟県南部以南の日本海沿岸部に追究したものである。川田によると日本で行われてきた船殻造成法は3種に大別できる。(イ) 端を斜めに重ね合わせた板に、湾曲した鋸鑿であらかじめ穴をあけておいてから、基本的に3種の鉄の船釘を打ち込む、瀬戸内海で発達した接ぎ合わせ法、(ロ) 鼓型に両端の開いた木製の接合具で、平らに並べた板を接ぎ合わせる、チキリ締め法、(ハ) アイヌの「イタオマチブ」に見られる、側板に穴をあけて繊維で縛る縄綴じ法。これらを比較民族的視点から広く展望している。

洲澤は自らが北米先住民の間に入って船作りを習得した、日本を代表するカヤック大工職人である。その特徴を活かして、北米先住民に伝わる樹皮舟（パークカヌー）の詳細を職人の目から書き起こした貴重な論考である。後藤論考はこの地の樹皮舟にはふれていないので両論考を読むと「環太平洋」の原初的船の概要が把握できるであろう。

石村はオセアニアのアウトリガーカヌーの船殻形成について概観している。オセアニアのカヌーは削り船を基本としながら各地で大型化のために舷側板の継ぎ足しが見られる。その基本技法は板材に穴をあけてココヤシなどの紐で平張り技法で連結するものである。しかし石村によるとオセアニアの一部に擬似的な鎧張りも存在し、さらにその技術的変異が肋材の有無とも関連することを明らかにしている。

後藤は削り船系のカヌーが卓越するオセアニア、オーストラリアおよびアメリカ大陸において、より原初的な形態と見られる樹皮舟、獣皮舟、葦舟、筏舟などの船殻形成についてレビューを行っている。近年、琉球列島で3万年以上前の旧石器人骨や遺跡が発見されている。最新の見解では琉球列島は氷河期も陸続きにならなかったため、旧石器人は必ず海を渡ったはずである。当時の石器の技術からして大木を削るのは困難だと思われるので、この論考は日本列島最古期の航海者の実態に迫るための基礎資料となるであろう。

深澤は自らが長年行ってきた日本古代、縄文時代から古墳時代にいたる船関係の出土資料を集積したデータを提示した。丸木船、土器や銅鐸の絵、古墳壁画、模型など総合的な資料集になっており、その有用性は想像に難くない。

門田・宮澤は専門とする海洋映像の中で、オセアニアから東南アジアにいたる広範囲な地域で現在でも残る、あるいは文化復興の脈絡で復元された伝統船の映像を提供している。映像には葦舟（葦浮き）や竹筏も収録されており、石村・後藤論考と呼応する部分がある。

本書は深澤の資料集成と門田・宮澤の映像資料によって多角的な内容となり、今後本論集はこの種の問題を論ずるさいの基軸的な文献になるだろうと自負している。

共同研究者・研究協力者一覧

共同研究職分	氏名	所属機関	専 門	所属期間
1. 海域・海民史の総合的研究				
1-3 環太平洋海域における伝統的造船技術の比較研究				
代表者	後藤 明	南山大学	海洋人類学	2009.8.4～ 2014.3.31
副代表者	平井 誠	神奈川大学	人文地理学、地誌学	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	赤羽 正春		民俗学・考古学	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	石村 智	奈良文化財研究所	考古学	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	板井 英伸	沖縄大学地域研究所	物質文化論	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	大西 秀之	同志社女子大学	人類学	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	川田 順造	神奈川大学	人類学	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	昆 政明	神奈川大学	民具学	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	深澤 芳樹	奈良文化財研究所	日本考古学	2009.8.4～ 2014.3.31
共同研究者	門田 修	有限会社海工房	映像作家	2009.8.4～ 2014.3.31
国内研究協力者	洲澤 育範	伝統シーカヤック造舟所 イサナ・カヤック	北米のカヤック、カヌー 復元研究	2009.8.4～ 2014.3.31
国内研究協力者	宮澤 京子	有限会社海工房	映像制作	2009.8.4～ 2014.3.31
国外研究協力者	シャマン・ ラボンガン		タオ族の船大工および海 人作家	
国外研究協力者	マニー・ シカウ		カロリン諸島の伝統航海 士・船大工	2013. 逝去

※所属機関は2013年4月1日時点